

ハイデルベルク信仰問答より

問19 あなたは、このことを、どこから知のですか。

答え 聖なる福音からであります。神ご自身がエデンの園において、はじめて啓示し(創世記3:14-15)、次いで、聖なる先祖たち(創世記22:18、49:10)と預言者たち(ヘブル1:1-2、使徒10:43)を通して宣べ伝え、旧い契約に属する犠牲やそのほかの儀式によってあらかじめ示し(ヘブル9:13-15)、最後に、神ご自身の愛し給うみ子によって成就されたのであります(ガラテヤ4:4-5)。

今日からハイデルベルク信仰問答の新しい単元に入っております。本の表題では「聖三位一体」に入ったところで、問19-25が一まとまりとなっております。より大きな枠組みでは、「Ⅱ. 人間の救いと自由」の中に位置づけられている内容です(Ⅰ. 人間の罪と罪責——神の律法)。

問19だけをいきなり投げかけられても、読者には何のことだか分かりません。「このこと」とは何を指すかを認識することがまず重要です。いくつかの可能性があるのでしょう。

①問1-18までの内容全体(人間の悲慘に始まり、救い主イエス・キリストの登場まで)

②問14-18の内容(償いの原理)

③問18の答え(イエス・キリストとはどなたであるか)

おそらく、著者が言わんとしているのは③ではないかと思われます。主イエスが私たちの罪を身代わりに償うために遣わされたということの根拠をここから示していこうとしているのでしょう。「どこから知のですか」と問うていますが、ここで言う「知る」とは、ただ単に頭知識として知ることではありません。ヘブライ語で「知る」と言うときに、夫婦がすべてにおいて一つとされることを表す動詞として用いられるように、読者が主イエスを人格的に知ることを表しています。つまり、「信じる」ところに行き着かなくては、これまでの問答は目的を果たしたことにはなりません。

問19の答え全体を概観してみると、そこには旧新約聖書全体の内容がまとめられていることが分かります。そして、聖書がまさに読者に伝えようとしている「神の救いの歴史」がどのように啓示され(開き示され)てきたかがポイントごとに示されているのです。

「聖なる福音」という、ややかしこまった表現が使われていますが、「福音」とは聞く人の心に喜びが湧いてくる嬉しい知らせのこと。「神様があなたをこんなふうな罪から救おうとしてくださっているんですよ」というメッセージです。「聖なる」とは、その救いのメッセージが人間には属していないということです。聖なるものはすべて神に属していますから、神から人に一方的に与えられる恵みだということを言い表しています。

以下の答えを整理すると、「神の救いの歴史」が4つの内容にまとめ上げられていることが分かるでしょう。

- ①エデンの園で与えられた救いの約束
- ②先祖たちと預言者たちに与えられた救いの約束
- ③旧約律法（特に動物犠牲）が表していた救いの約束
- ④主イエスの受肉によって完成した救い

①エデンの園で与えられた救いの約束

これは、創世記3章でアダムとエバが「善悪の知識の木」の実を取って食べたことにより、神の主権を奪い取った事件を指します。人間は本来この時点で神の呪いを受けざるをえない存在となったのですが、呪われたのは人間を欺いた「蛇」であり、人間にはむしろ救いの約束が与えられました。

神である主は、蛇に向かって言われた。「このようなことをしたお前はあらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で最も呪われる。お前は這いずり回り生涯にわたって塵を食べることになる。お前と女、お前の子孫と女の子孫との間に、私は敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く。」

（創世記3:14-15）

これは「原福音」と呼ばれる箇所、やがて「女の子孫」としてお生まれになる救い主が、蛇（サタン）の頭を砕くという約束です。しかし、その救い主が無傷ではすまないということが「彼のかかとを砕く」という言葉によって表されてもいます。

②先祖たちと預言者たちに与えられた救いの約束

次に、「先祖たち」「預言者たち」という二種類の人々への救いの約束が呈示されます。「先祖たち」とは、イスラエル民族の父アブラハムと神との間で交わされた契約がベースにある内容です。創世記15章において、神はアブラハムに次のような約束を与えられました。

主はアブラムを外に連れ出して言われた。「天を見上げて、星を数えることができるなら、数えてみなさい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」（創世記15:5）

この約束の言葉は、イサク、ヤコブへと受け継がれていきます（26:4、28:14）。イスラエルの父祖たちに与えられた約束は、その子孫（信仰の民）が数えることもできないほど増え広がっていき、その中からやがて「一人の王」が誕生するというものです。問19の中に創世記49:10が挙げられていますが、この箇所はユダ部族の末裔として「(世界の) 統治者」が生まれるという約束です。

後の時代に現れた多くの「預言者たち」も、同様の思想をもって民を励まし続けました。代表的な箇所として、イザヤ53章の「苦難のしもべ」が挙げられます。この謎の男は、ひどい苦しみを身に受け、多くの人の罪咎を償うと言われています。

彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、痛みの人で、病を知っていた。人々から顔を背けられるほど軽蔑され、私たちも彼を尊ばなかった。彼が担ったのは私たちの病、彼が負ったのは私たちの痛みであった。（イザヤ53:3-4）

このように、歴史を追うごとに、やがて現れる救い主がどういう方であるかがだんだんと具体的になっていくのです。ペリーはその他にも、詩篇22篇、エレミヤ23:5-6、ミカ5:1-4、ゼカリヤ9:9、ヨハネ8:58などを参考箇所として挙げています。

③旧約律法（特に動物犠牲）が表していた救いの約束

旧約時代には、神が指定された方法で多くの動物の犠牲がささげられました。問答の中で挙げられているヘブル9章の聖句を見ると、その動物犠牲の意味がよく分かります。

雄山羊や雄牛の血、また雌牛の灰が、汚れた者たちに振りかけられて、彼らを聖別し、その身を清めるとすれば…（ヘブル9:13）

その痛ましい動物の死、代価としての命によって、人間の罪がきよめられ、神の御前に「聖別」された存在となっていたのです。しかし、これらの犠牲はどんなにささげ続けても、完全に人間の罪を償うものとはなりません。神はそのことをよく分かったうえでその儀式を要求しておられたのです。では、その犠牲は何のためであったか。やがて到来する「真の犠牲」「神の償いの要求を100%満たしうる犠牲」を予表するものだったのです。

しかしキリストは、すでに実現している恵みの大祭司として来られました。人の手で造られたのではない、すなわち、この世のものではない、もっと大きく、もっと完全な幕屋を通り、雄山羊や若い雄牛の血によってではなく、ご自身の血によってただ一度聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです。（ヘブル9:11-12）

④主イエスの受肉によって完成した救い

このように、①～③で示されてきた「救い主の到来の約束」が、ついに実現しました。それが、主イエスの受肉という出来事だったのです。長い年月を経て待ち望まれてきた救い主がついに来られた。それは私たち一人びとりの罪を償うイエス・キリストであります。

クリスマスの子ども賛美歌の中に、「神様からのお約束」という歌があります。今日は最後にその歌詞を味わいましょう。（奥村馴染みの旧バージョンの歌詞をご紹介します。）

1.

昔ユダヤの人々は 神様からのお約束
尊い方のお生まれを みんなで待っておりました

2.

長い年月 ^{としつき}経つうちに いついづどこでそのお方
おいでになるか分からずに 悲しむ人もおりました

3.

ある日 御使いガブリエル マリヤの家に現れて
尊い神のお子様が 生まれるでしょうと告げました